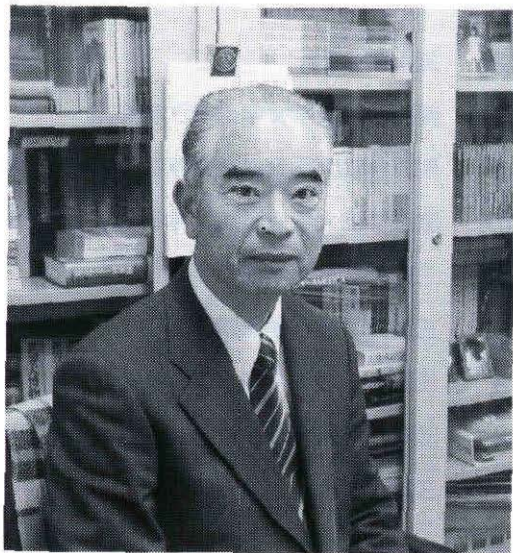


宮崎彰男先生を送る

著者	宮地 信弘
雑誌名	Philologia
巻	40
ページ	1-4
発行年	2009-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10076/10602



宮崎彰男教授

宮崎彰男先生を送る

宮 地 信 弘

宮崎彰男先生は教育学部英語科の大黒柱であった。どっしりと構えられた先生の悠揚迫らぬ態度には同僚の教員のみならず事務員も学生も安心して信頼を寄せた。先生は英語科の中心にあつて、常に英語科のことを考えられ、先を見通した適切な判断を下された。先生のしっかりとした舵取りがあったればこそ、弱小所帯の英語科は曲がりなりにもいくつかの学部改革を無事に乗り越えることができたという思いが強い。先生に頼りきっていただけに、先生が定年を迎えられ、次年度からもうそばにおられないことを思うと、寂しさとともに抛り所がなくなるという漠とした不安に襲われる。

先生は 2005 年 4 月から定年退官を迎えられる 2009 年 3 月まで教育学部附属小学校の校長職を 2 期にわたって兼任された。先生のお人柄を知る者からすれば、その職分は実に適任であった。とはいえ、大学で講義をしながら他方で校長を勤められるということは、時間的に忙殺されるだけでなく、組織の長として大きな職責がその双肩にかかり、外からは窺い知れないご苦労があったはずだ。特に 2008 年は附属小学校の中期目標の評価報告書を作成しておられ、大変なご様子であった。にもかかわらず、先生が附属小学校のことを話されるときはなぜか楽しそうであった。附属小学校で日常的に接せられる子どもたちの幼い純粋さが先生をお慰めしていたのではないかと推測する。

附属小学校の生徒たちを優しく見守られる先生は英語科学生にも優しく（それは厳しさを併せ持った優しさではあった）、彼らを大事にされた。先生が学生や院生をお叱りになるところを私はほとんど見たことがない。

だが、一度だけ先生が院生に面と向かって不快感をあらわにされたことがある。大学院生が催してくれたある年の謝恩会の２次会での席であったと記憶している。津駅近くの居酒屋で宮崎先生と私は２名の院生と小さなテーブルに相對して座り、とりとめもない会話を始めた。そのうち決して酒癖がよいとは言えない一人の院生が、その時不在であった英語科教員の名前を呼び捨てにしたかと思うと、携帯電話を取り出し、私たちと話している最中に傍若無人にも目の前であちこちに電話をかけまくってすでに帰っていた他の院生に今すぐその場に来るように高圧的な口調で言い始めた。普段はおとなしく謙虚な女性であるが、まるで人格が入れ替わったかのようなその豹変ぶりを目の当たりにして、私はこの院生の暗い無意識にはどんな蛇が潜んでいるのだろうと思いながら眺めていたが、先生はそのとき「あなたが私の娘だったら、今すぐ携帯電話をしまいなさいと言うところです！」と真顔で言われた。あまりのマナーの悪さに先生は相当に不愉快な思いをされていたのだと思う。そう言われてもその院生は、どこ吹く風といった様子で態度を改めることはなかった。だが、その翌日か翌々日、しらふになったその院生が私たちの研究室に挨拶に来て、何事もなかったかのように「２年間のご指導ありがとうございました」と普通に言うので、先生も私も啞然として苦笑いをするしかなかった。

先生のご専門は英語学であった。特に文体論を中心に研究を進められ、最近では、英米人が日常生活で何気なく用いる言語に潜む隠喩表現とその隠喩を通して現実を捉えるときの認識構造のあり方、また広告や新聞等のジャーナリズムで用いられる英語表現の特質の解明などに興味をもたれていた。授業でもそれらを取り上げられ、面白い言語表現がもたらす効果や背後の構造を言語学的な知識に基づいて多面的な視点から分析された。丁寧に講義される先生の授業はわかりやすく、学生に人気があった。先生の授業に刺激を受けた学生の中には、日常言語における空間メタファーの

分析や広告英語の構造分析などを卒業論文のテーマに取り上げる学生が毎年何人かいた。先生の指導を受けて早くから事例を収集し、きちんと分析していく彼/彼女らの卒論はいつも質がよかった。

先生はまたパソコンにも大変詳しくかった。パソコンを Vaio や La Vie といった愛称ではなく、NEC PC-98〇〇などと製品番号みたいな名称で呼んでいた初期の頃からパソコンに関心を持たれていたのは、(人文学部の宇納先生を除けば) 教育学部英語科では宮崎先生ぐらいではなかったろうか。今でも先生の研究室に入ると大きなモニターやプリンタが複数台どっしりと木製の机に乗っていて年季の入れ方が違うなどと思う。マックからウィンドウズに乗り換えた私などもウィンドウズの操作法についてはよく教えていただいた。インターネットが普通になってからは、先生はよくネット上で見つけれられたクラシック音楽のサイトから流れる音楽を聴きながらお仕事をされていた。文書作成の技術を生かされて英語科の時間割や卒論の報告書など毎年使用するファイル・フォーマットを作成されるなど、英語科事務の電子化が進んだのも先生のテクノロジーへの関心と先進性が大きく作用していたのは間違いない。

私が先生とお付き合いをさせていただいたのは私が三重大学教育学部に赴任して以来のことで、もう 25 年以上にもなる。四半世紀にわたる記憶の映像の中からは、空き時間にテニスを楽しんでいた頃の若々しいお姿が浮かび上がるし、今は亡き池永先生と日本酒を酌み交わされるときに笑顔も笑い声とともによみがえる。また欠伸をされるときに出される大きなお声も聞こえてくるし(それは共同研究室に響き渡るくらい豪快なものであった)、追い出しコンパなどでフランク永井を歌われるあのぞくぞくする低音や「昴」を熱唱されるときに朗々とした歌声も響いてくる。私の結婚式の司会をしていただいたときの巧みな仕切り方は昨日のこのようだ。昔の学生がつけた渾名も思い出すが、それは控えておこう。

私が教育学部に赴任した当時、英語教員の研究室は教育学部専門 1 号館の 4 階にあった。晴れた日には研究室の窓から伊勢湾が見えて実に気持ちよかった。しかし、2、3 年ほどして、人文学部の創設とともに、われわれの研究室は教育学部棟から不便な共通教育 1 号館 2 階へ引っ越すことになった。着任したばかりの私にはそれまでの経緯がよくわからず（そういう約束になっていたのだろう。このあたりも弱小所帯の悲しさである）、研究室移転は、私の目には島流しのように映った。その頃英語科代表をされていた長老の先生も共通教育 1 号館への移転を好まれず、「死んでもここは明け渡さん。いざとなったら籠城だ」と息巻いておられたが、あっけなく移転とあいなった。その後、島流し状態が 20 年以上も続いた。

奇しくも先生が退官されるというこの年にわれわれは教育学部 1 号館に移ることになった（昔を知る者からすれば古巣に戻ったに過ぎない）。教育学部校舎が期せずして耐震改修工事の対象となり、われわれ英語科は教育学部専門 1 号館の 3 階に新しい研究室を得たのだ。移転は師走の慌ただしいときに行われた。それまでの古くて、暗くて、寒くて、汚くて、埃っぽくて、周りがうるさい牢獄のような（like a bitterly cold and old, dark and dirty, dusty and discouraging dungeon full of din and despair）劣悪な環境から 20 数年ぶりにやっと抜け出すことができた。何とか人間らしい研究環境が与えられてこれからというときに先生を送らねばならないのは本当に残念でならない。せめてもう数年先生には新しい研究室の居心地の良さをゆっくり味わってほしかった。しかし、「すべてのことには時がある」（“To everything there is a season.”）。大きな定めの時というものがある。いまは先生を送り出す時で、我々としてはその時の定めを受け入れることこそ「時になう」ことなのだろうとも思う。

英語科の大黒柱として私たちを正しく導かれた先生に深い感謝の気持ちを込めて、先生のこれからの人生に幸多からんことを心から祈念する。